ウイグル文　文殊師利成就法の斷片一葉

小田壽典

目次

はしがき
一　文書の概觀
二　文書の時代
三　Qayan qan の稱號
四　チベット佛教の影響
五　テキスト（付・チベット文）

はしがき

回鶻帝國滅亡（八四〇年）後、西遷したウイグル系遊牧諸部は、中央アジア諸地域に王國を建て、トルキスタンの成立をみた。[1] この遊牧諸部が定住化の傾向をたどると同時に、ソグド（胡）人などの西域商業民やオアシス諸國の都市住民・農耕民も、トルコ族と混血したり、トルコ語を話すようになって、漸次トルコ化した。[2] かくして彼らは在來諸文化を繼承し、さらに周邊地域から諸影響を受けながら、いわゆるウイグル―トルコ族としてモンゴル＝元朝支配期に至った。

さて東トルキスタンおよび敦煌地方から將來されたトルコ語文書資料中、佛典寫本（版本）に關していえば、諸佛典は、

トハラ語A（Twγry）[3]・中國語（Tavγač）[4]・インド語（Änätkäk）[5]・チベット語（Tüpüt）[6]から飜譯されたことが確認され、ウイグル佛教文化の一端を明らかにしてくれる。ただ、從來の注目すべき、少くない解讀研究の成果にもかかわらず、このような佛教受容を裏づける文獻史料が不十分なために、各文書資料を總括的かつ適確にウイグル文化史上に位置づけることはたやすくない。今もなお文書の解讀によって新史料を提出することが、缺かせない基礎的作業の一つであり、大谷蒐集品中に、偶々發見した小斷片の一葉を敢えて紹介するのも意味を持つものと考える。

龍谷大學圖書館所藏の大谷探檢隊將來品文書番號二六九五は、ウイグル文トルコ語の文殊師利成就法の寫本斷片である。コルディ＝サンギャシリ Qoludï Sanggâśrï という人物によってチベット語から飜譯された。しかるにラドロフ W. Radloff の發表した版本に、これと同一人物の譯者名がみえ、その版本の譯述は、ガバイン A. von Gabain によれば、ウイグル王國下で行われた。石濱純太郎篇「西域古代語の佛典――研究の回顧と展望――」（『西域文化研究』第四、四四―四五頁）でも、ガバイン說に贊意が表わされた。しかしながら、ここに紹介する斷片の跋文と比較檢討するとき、ガバイン說は訂正を要するように思われる。

ところで文書番號二六九五は、かつて西域文化研究會（代表　石濱純太郎、一九六〇年）の事業において解讀の對象に數えられたものの一つであった。[7] 本稿での先達の研究に對する、思わざる批判も上記研究會の成果として寬恕願いたい。對比文獻のチベット文については、龍谷大學の百濟康義氏より全面的協力を得、音譯と對應部分の譯出を試みた。この種のチベット密教佛典は難解であり、またウイグル、チベット兩文とも解讀に十全を期しえなかったが、至らぬ筆者の責任であることを諒とせられ、大方の御教示を仰ぎたい。

一　文書の概觀

大谷蒐集品文書番號二六九五[8]は、縱横九×二二センチ、淡黃色に變質した、やや厚手紙の一葉である。ウイグル文は縱

書き、一面(a)に二二行、他面(b)はウイグル字一五行のほか、四ケ所にチベット字の手寫がみえる。ウイグル文の書體は走行體（cursive）で、一見粗雜にみえるけれども稚拙ではない。(b)面末尾にある數行のウイグル文と三ケ所のチベット字は別筆であり、おそらくあとからの添え書きであろう。筆跡は、別筆を除くと磨滅して不鮮明であり、さらに判讀の困難なところもある。

ウイグル文の內容をみると、(b)面は經典飜譯の跋で、「文殊師利の成就 Mañčuširïning sadanasï（skr. Mañjuśrī-sādhana）」は、コルディ＝サンギャシリ Qoludï Sanggâširï という人物が、「新たにチベットの言葉から、私が飜譯した」と明記されている。この跋文と(a)面の本文末尾に、「マティ＝パンディト Madï pandït」によって作られたとあることから、西藏大藏經所收の「聖文殊師利成就法 ḥphags pa ḥjam dpal gyi sgrub paḥi thabs, skr. Ārya-mañjuśrīsādhana」（Mati 作、Dānaśīla 譯）と關係がありそうなことは、直ちに判斷される。そしてチベット語からの譯者コルディ＝サンギャシリは、かつてラドロフ W. Radloff が發表したウイグル文版刻刷斷簡[9]の譯者と同一名であることが注目されるのである。

西藏大藏經所收の「聖文殊師利成就法」は、デルゲ版東北大學目錄番號二七一七と北京版大谷大學目錄番號三五三九にある。便宜上、版本が刊行されている北京版（第七九卷　丹殊爾祕密疏部三四、八五―五―三～八六―一―三）に對照すると、ウイグル文(a)面二二行は、八六―一―一～八六―一―三に當る。これは、Bstan-ḥgyur Rgyud-ḥgrel LXVIII Ñu 99a^3～99b^3 の九行のチベット文のうち末尾三行（99b^1～99b^3）に對應する。したがってチベット文前部六行分に相當するウイグル文が、あるいは別の一葉に書かれて存在するかも知れない。しかし龍谷大學所藏の大谷蒐集品中には、これに類する斷片はまだ見當らない。ウイグル文の古代トルコ語はチベット語譯と、おおよそ對應し、同じ佛典の內容を傳えるものであることは疑う餘地がない。

文殊師利成就法というのは、インドにおける後期密敎の金剛乘 Vajrayāna に屬し、諸尊崇拜に關する成就法の一つで

ある。[11] 梵文テキストは、B. Bhattacharyya 編の Sādhanamālā[12] によって知られるが、その中には内容上對應するものはない。また中國語（漢）譯も知られていない。

この寫本斷片の書寫およびトルコ語譯の時代については、次章で詳しく述べるが、若干の書寫・語彙の特徴について觸れておきたい。四ケ所に書かれるチベット字のうち、上述別筆はともかく、(b)面一〇行目 lïγso lïγso（tibet. legs-so）の左側にみえる、一種の「飾り字體」のチベット字は、同じく "legs-so" と讀むことができ、筆跡はウイグル本文と同じもののようにみえる。そして、この「飾り字體」は、スタイン蒐集品中の元朝至正一〇年（一三五〇）書寫佛典[13]のものと、書型が全く同じである。次に、譯經の跋文(b)面第二・三行に、čoqdu yarlïγ üzä〈威光ある命令によって〉とある、čoqdu〈威光ある〉は、蒙古語 čoqto の借用に違いない。これに對應する古代トルコ語に čoγluγ〈fiery, flaming; splendid〉（G. Clauson）[14] の語が存在することからすれば、ここで敢えて蒙古語を使用する意味に注意を拂わなければなるまい。要するに飜譯・書寫の時期に關して、ウイグル族がチベット・モンゴルと交流した時代を念頭におくことができるのである。

二　文書の時代

ウイグル族がチベット・モンゴルと交流した時代は、普通にはモンゴル＝元朝支配期である。しかるに、すでに觸れたように譯者コルディ＝サンギャシリは、ラドロフの刊行した版刻刷斷簡「聖王訓誡と名づくる大乘經[15]」の譯者でもある。この斷簡に關して、ラドロフおよびガバインによって飜譯の時代が論じられた。ラドロフは吐蕃占領時代（八～九世紀）と考え、ガバイン說はウイグル（高昌）王國時代（九～十三世紀）とする。問題はラドロフ文書にみえる譯經の跋にある。その版刻刷斷簡第三八～四〇行に、

Bodistv oγuš-luγ qaγan qan y(a)rlïγ-ï üzä, Qoludï Sanggâsïrï tüpüt tïl-ïnïn yangïrtï uγγur tïlïnga

の命令によってコルディサンギャシリがチベットの言葉から新たにウイグルの言葉へ〔譯した〕。

とみえ、問題の所在は下線部分の解釋にある。すなわち、Bodistv oγuš-luγ qa?an qan をチベット王とみるか、ウイグル王とするかによって、說はわかれるのである。今、この語句を、「文殊師利成就法」の跋[15]によって、"čoqdu (čoqto)"〈威光ある〉という蒙古語におきかえることができるとすれば、彼はチベット王でも、ウイグル王でもなく、モンゴル（＝元朝）王に比定することがより妥當であろう。しかし上記君主を表わす語句の解釋が十分でなければ、必ずしも問題は解決したことにならない。それについてやや詳しく述べてみたい。

さて下線部分について、ラドロフは、「王たるボディサトヴァ＝オクシュルクーカガンの命令により……」[16]と譯す。「ウイグル語譯を命じたのは、おそらくチベットの王と考えられ、とにかくモンゴル王の誰でもない。テキストに名がみえる譯者は、インドからきてチベットで、八世紀末頃に生存した人物である」[17]という。ラドロフは譯業を命じた王をチベット王と考え、譯者についてその人名の後半部サンギャシリ Sanggâśirî (skr. Saṃghaśrî) が梵名であるところから、インド人とみなしたのである。ただラドロフが決してモンゴル王ではないと斷定したのには、この斷簡がモンゴル時代までは到底くだりうるものではないと判斷した前提がある。それは、當時新しく發見されたウイグル文テキストに關する理解の手段が不備であったにもかかわらず、その研究に積極的にとりくみ、彼自らが古代ウイグル語に關する「音韻研究を全くまとはずれな構成に導いた」[18]結果である。つとに批判の對象ではない。

次に下線部分の解釋についてガバイン說は別な理解を示した。すなわち、「ボディサトヴァの家系を引くハガン・ハンの命令によって……」[19]と譯す。「ボディサトヴァ系のハガンは、ただ全くウイグル諸王の一人にほかならず、八五〇年以降高昌の地に居住した人物であり、決してチベット人ではない」[20]という。この文書の後期性を示すウイグル文の正字法や版刻刷という條件を考慮して、十世紀頃に、文書成立の時期を當てるのである。ここでガバインが「ボディサトヴァの後裔のハガン・ハン」と譯出したのは、中國史書にみえる、回鶻帝國の祖宗の一人の「菩薩 Pusa? Bodistv?」（六二九年に初めて唐朝に入貢したウイグル族の君主）を念頭においてのことであろう。石濱純太郎篇「西域古代語の佛典」においても、

このガバイン説に贊意が表わされた。Bodistv (sgd. pwδstβ<skr. bodhisattva)[20]は、いうまでもなく佛教用語たる菩薩に對應するトルコ語である。しかしかつてセレンガ地方にあったウイグル部の君主「菩薩」の名が Bodistv の中國的意譯であったか、または當時ウイグル部が佛教的であったという確證はない。次に oγuš (oγus～uγuš) は、oq～*oγu の語根から生じた語で、本來比較的小單位の血緣集團の成員 (G. Clauson によれば、單一家族よりも大きく、tribe, clan よりも小さい單位、family, extended family) を表わす言葉であるとみられるが、[21] ウイグル文書では派生的意味（「世代 generation」「同類」）でも使用された。しかしながらあくまでも、類似集團の成員または領域を示すもので、'Stamm'↓'Abstammung' の意味で理解されるような、基幹・系統を表わす言葉ではないと考えられる。例えば「佛頂尊勝陀羅尼經」のトルコ語重譯に、「菩薩同會處生」の對譯として、"Bodistv oγus-luγ bolmaqï bolur" (zu der Bodhisattva-gemeinschaft zu gehören wird stattfinden)[22] とみえるが、前半部分は同一表現である。要するに "Bodistv oγušluγ" を、ウイグル族の祖宗たる「菩薩の後裔の (von Bodhisattva- Abstammung)」と譯すのは、少しく付會の感をまぬがれない。

さて "qaγan qan" の解釋にも問題がある。'qaγan' と 'qan' が並列される兩語の結び付きは、語法上至極不安定な形であるといえよう。ラドロフは奇妙な表現であるが、[23] 'qaγan' は 'qan' (王) の名に屬するものと理解し、ガバインは、"xaγan und xan" と譯す。しかしながら他の若干の用例により、これは一種の熟語であることがわかり、「主權者 (Herrscher, ruler)」または「至高の君主」[24] を意味することは疑いない。多分文法上では、二詞一意 (Hendiaduoin)[25] とみてさしつかえないにしても、この熟語の成立條件を考慮した場合、きわめて特定なものと考えざるをえない。すなわち、モンゴル＝元朝の支配者 Qaγan (Qa'an) のトルコ的飜譯であり、まさに中國的飜譯の「合罕皇帝」という表現に相應するからである。蔡美彪編「元代白話碑集錄」中、一二八〇年の萊州萬壽宮令旨碑（在山東省掖縣）に、

依着已前成吉思皇帝聖旨、合罕皇帝聖旨、蒙哥皇帝聖旨、今上皇帝聖旨裏、云々[26]

とある。「合罕皇帝」すなわち哈罕皇帝について、蔡美彪は、「但因蒙古皇帝、自窩闊台始正式用此稱號、故蒙古人又用

〝哈罕皇帝〟一詞專指太宗窩闊台」と注釋する。[29] 果たして哈罕皇帝の稱號が太宗オゴタイに始まり、特にオゴタイに歸せられる呼稱となったとしても、蒙古人自身が「合罕皇帝」という表現を使用したというのではなく、蒙古人は「合罕（哈罕）、Qa'an、Qa'an」と呼んだにちがいない。その中國的表現が「合罕皇帝」なのである。そうだとすれば、そのトルコ的表現たる〝Qa'an qan〟の稱號は、オゴタイに限られるものであろうか。

三　Qa'an qan の稱號

まず第一の例證はラフマティ G. Rachmati 刊行の「北斗七星經」（Yitikän Sudur）斷簡である。[30] この斷簡の跋文についてレウィキー M. Lewicki、リゲティ L. Ligeti の研究があるが、[31] それより先、ラウファー B. Laufer によってチベット語譯が紹介され、蒙古語譯の存在したことも知られる。[32] チベット版の跋によると、この經典は中國語版からトルコ語譯が行われ、さらに蒙古語に譯された。そしてのち丁丑（一三三八年）にチベット語版が成立したという。リゲティによれば蒙古語版の刊刻は、天曆三年（一三二八）戊辰十月一日の日付に行われた。[33] 彼はトルコ語譯も同時期においているが、實は明らかでない。トルコ語版の跋文は寫經功德記類のもので、ラフマティ刊行の斷簡（寫本）A[34]と斷簡（版刻）C[35]に日付が記載される。斷簡Aの日付は十二支記年法によるので、差し當って年代を確定できないが、干支記年の後者、斷簡Cの年代決定はそれほど困難ではない。そこに問題の〝Qa'an qan〟の用例がみえる。

114) ymä kui sïpqan-lïγ ud yïl, altïnč
そして癸なる十干の丑 年 第六

115) ai, bir yangï aγïr uluγ busaḑ bačar
月 初 一(日) 重 大 齋 戒

116) kün özä, m(e)n üč ärdini-lärtä
日 に 私 三 寶 に

117) p(e)k qatïγ süzük kirtgünč kǫngül-lüg
げに かたく 清き 信 心 の

118) upasanč sïlïγ tigin.
優婆夷 シリグ=テギン

119) alqu türlüg ada-larta umuγ boltačï
一切 種の 厄災に 效驗あるところの,

120) arïš arïγ bu yitikän sudur ärdinig.
純清なるこの北斗七星　經　　寶を

121) aqṣanïp, ming kuun tükäl yaqḍurup.
誦唱し，　千　　卷　完全に　點火せしめて

122) adïn-larγa ülämiš buyan küčintä,
回　　向　　の　功德　力において

123) adïnčïγ ïduq
選ばれたる　聖き

124) qaγan qan suu-sï · aγïr buyan-lïγ
哈罕　皇帝　陛下　重い　福德ある

125) qong tayqiu qutï, ančulayu oq
皇　太　后　陛下，同じく

126) qong qiu qutï, kusal-a sitibal-a
皇　后　陛下，和世球　碩德八剌（を）

127) bašlap altun uruγ-larï birlä.
先頭とする　黃金の種族　ともに

128) alqu ödtä buyan-larï ašïlïp üsḍälip,
一切　時に　福德　　增長し

129) adasïz uṣun yašamaq-ta ulatï
つつがなく　長壽を保つこと等

130) alqu türlüg kösüš-läri qanïp büdüp.
諸　種　の　願望は　　成就し

131) alqu-nï biltäci burqan qutïn bulmaq-larï
一切を　認知せる　佛の　果報を　得ること

132) 〔bolz〕-un.
あれかし。

とある。[93] リゲティは，第一一二六行の Kusal-a が Qutuγ-tu Qaγan（明宗　在位一三二〇—一三二三）に當り，Sitibal-a は Gegegen Qaγan（英宗　在位一三二八—一三二九）であり，在位年代を考慮して跋文の日付「癸丑」を一三七三年（明・洪武六年）と推定した。だが殘念ながら，リゲティは "Qaγan qan" の意味をよく理解しなかったに違いない。癸丑を一三七三年においたことは跋文の內容をさして現實性のないものであるという，誤った結論に達せしめた。ここは，さらに六十年前の一三一三年（元・皇慶二年）におかなければいけない。Qaγan qan は在位皇帝を表わす重要な用語で，元朝第四代仁宗（在位一三一一—一三二〇）に比定されるのである。そうだとすれば，Qong tayqiu（皇太后）は仁宗の母，興聖皇太后（弘吉剌氏）である。[94] Qong qiu（皇后）は，英宗碩德八剌の生母，莊懿慈聖皇后[95]（弘吉剌氏・生年至元二二年三月丙子）で，元史卷一一四には，

皇慶二年三月册爲皇后

とみえる。のちに第七代明宗となった和世球は，第三代武宗の長子である。

ところで、興聖皇太后は、（順宗）答剌麻八剌太子の妃答已（又は答吉）[39]で、第二代成宗崩御のとき、出居さきの懐州から次子の愛育黎拔力八達（仁宗）を立てて京師に入り、安西王阿難答派をおさえ、北邊にあった長子海山（武宗）を迎えて即位させた。かくして彼女は皇太后になったが、元史卷三一、明宗本紀に「（大德）十一年武宗入繼大統、立仁宗爲皇太子、命以次傳於帝」とある次第は、この皇太后の配慮であったにちがいない。英宗本紀（卷二七）には、

仁宗嫡子也、……仁宗欲立爲太子、帝（英宗＝碩德八剌）入謁太后、固辭曰、臣幼無能、且有兄在、宜立兄以臣輔之、太后不許。延祐三年（一三一七）十二月丁亥、立爲皇太子

とみえる。太后は興聖皇太后、兄とは武宗の長子、和世球のことにほかならない。以上の經緯から仁宗在位中、一三一七年まで皇太子が未册立だったこともわかる。皇慶二年癸丑（一三一三）六月一日の日付にあって、和世球は、大德四年（一三〇〇）十一月壬子の生れで[40]、十四才、碩德八剌は大德七年（一三〇三）二月甲子の出生で[41]、十一才の年令であり、両者とも未だ宮廷内で養育されていたのである。跋文中に諱名でみえている理由も判然とするほか、一三一三年における元朝廷内の主たるスタッフは、この跋文にすべて列ねられていることが明らかになる。ひるがえって Qaγan qan の稱號は在位皇帝の仁宗を指すものでなければならない。

チベット語版によれば、トルコ語譯は Alin Temür tai-se-du（阿隣帖木兒大司徒）によって行われた。ラウファーの提示する跋文Aには、

このウイグル字にて現在ある佛典は、これまで何ら他語に譯されず、それによって多くのモンゴル人は、彼らの信仰心を吐露したので、これはわがモンゴルの言葉にも譯されるべきである。……

とみえ、跋文Bには、

天暦元年〔一三二八〕辰歲十月一日に、版本は印刷された。この經典はインドから、あるインド學者と玄奘によってもたらされた。そして中國で譯された。中國にて弘通する間に、菩薩の種姓に生まれた大皇帝の宰相の要請により、ウイグルの敎師、Praĵñaśrī によって、モンゴルの言葉と文字に譯され、二千部が印刷された。Alin Temür tai-se-du によって作られたウイグル〔トルコ〕語譯

は、千部が刷られた。書物は發送されて、モンゴルとウイグルの間に流布した。

とある。[41] 阿隣帖木兒はウイグルの名族、もとスルミ（Sulmi; 唆里迷）國の哈剌亦哈赤北魯の子孫である。彼の祖父、月兒思蠻は憲宗に仕え、ビシュバリクにいたが、のち平涼に一族とともに移住した。父の阿的迷失帖木兒は世祖、ついで阿隣帖木兒ともども成宗に用いられた。武宗・仁宗時代の事蹟は明らかでないけれども、榮祿大夫翰林學士承旨に累進し、英宗の治世には、「以舊學日侍左右」とあり、「飜譯諸經」とみえる。明宗の皇位繼承には北方に迎請し、文宗の至順元年（一三三〇）五月には、大司徒に任じられたのである。[42] 以上阿隣帖木兒の事蹟からもトルコ語譯の時期を皇慶二年（一三一三）以前におくことは可能である。

次に第二の用例は、居庸關碑文のウイグル文造塔功德記（東壁及び西壁）にある。これについてはいうまでもなく、村田治郎篇「居庸關」（京都、一九五七年）にみえる藤枝　晃教授の研究に負わなければならない。居庸關過街塔の創建は、元朝至正年間（至正三年・一三四三）であり、[43] 順帝ダルマシリの治世に屬する。西壁のウイグル小字刻文（第一六偈～第三一偈）は、造塔功德記の後半で、もっとも破損のひどいところでもあるが、「今の天子順帝の事蹟は、一七偈以下に讃えられていると考えたい」[44]（藤枝　晃）。少くとも、第二〇偈以下は造塔功德の回向文である。

xa*r*an suu-si bodistw idimz（第20偈）[45]
哈罕　陛下　菩薩（たる）われらが主
üküs-nüng idizi xa*r*an qan suu-si-ning（第24偈）[46]
あまた(衆生)の主(たる)哈罕皇帝陛下の

內容上よく一致する蒙古語パクパ小字刻文では、xa*r*an, xa*r*an qan の語に對して、x·an（xa·an）で寫されるが、兩文とも在位皇帝を表わす言葉であることは明らかである。

第三の用例は清朝時代、カシュガル出土のチャガタイ・トルコ語文獻にある。羽田　明教授の譯注研究から拔萃すれば、

El-kyssasina 1227 inji yilda khāqān khan-dīn yarlïq kälip
要するに H.1227年（淳祐7年）に皇帝から命令が來りて，

とある。[47]

以上これまで知られている例證からすれば，“Qa'an qan”の語は，文法上二詞一意（Hendiaduoin）の語法ではあっても，特定な熟語であることが理解できたと思う。モンゴル＝元朝において Qa'an の稱號がオゴタイ汗より始まったとすれば，この熟語はまさしくそのトルコ語譯に當り，哈罕皇帝という表現に應ずる。ウイグル人は，おそらく歷代の在位皇帝を示す言葉として用いたに違いなく，清朝時代に至っても主權者の稱號として使われたことがわかる。したがって，ラドロフ文書の用語も全く同樣な表現であり，それに應ずる大谷文書の“čoqdu”が蒙古語〈威光ある〉である故に意味を持ち，そのように解讀して誤りないことが明らかになったと思う。要するに，ウイグル文「聖王訓誡と名づくる大乘經」および「文殊師利成就法」はモンゴル＝元朝時代に飜譯されたと考える。ではモンゴル＝元朝時代，オゴタイ汗以降にしても，いつ頃に限定されるか，それに關してはごく一般的な觀點から考察するほかに，有效な方法はない。おそらく元朝のラマ教受容後，さらに限れば，一四世紀に入ってからの可能性が大きいといいうるにすぎない。

四　チベット佛教の影響

チベット佛教がトルキスタンのウイグル文化にいかなる關係を持ったかという課題は，興味深くまた未確定の問題である。本稿に關しても重要なことであるから，若干言及しておきたい。ガバインによれば，日常的用語や名稱はチベット語から借用されていないが，ただ yirtinčü ‘die (irdische) Welt’ と suburγan ‘Grabkammer’ はチベット語に由來する。この事實はチベット人の佛教的熱意の現われであり，彼らがタリム地域にしばしば軍事干涉を行った結果にほかならぬという。[48] この發言はいささか重大である。というのは，兩語ともに佛教・マニ教關係のウイグル文書では頻出度の高い

語彙であり、チベット佛教との關係を比較的古くにおく理由となるからである。だが、suburγan はソグド語 *zmrγ'n に結び付けられるべき語であることは、すでに疑いなさそうである。[49] yirtinčü もまたチベット語源説が一部で行われているとしても、はなはだ疑しく、蒙古語にも入ったこの語の語源説が、もしコワレフスキーの辭典の記載に由來するものとすれば、一種の不注意な誤解から生じた説であるといわねばならない。[50] ウイグル文書にチベットからの借用語が全く存在しないというのではないが、語彙の觀點だけからチベット佛教との關係を議論することは、差し當って適切ではないように思われる。

チベット經典の飜譯については、前章までに取り擧げた Qoludi Sanggâširi 譯の兩經のほかに、二種のものが知られている。一つは、羽田 亨博士によって「至正十年書寫佛典」と名づけられたもので、すでに觸れたが、スタイン蒐集品の、寫本册子殘葉六三フォリオに收められている。[51] 寫經の跋に關してはすでに研究紹介された通りである。[52] その前文となる部分に、譯經の跋とおぼしき記述が次のようにみえる。

46a3) …… tört türlüg käsig-läriglg
四 種の 次第を

4) yol-ča udusmaq-lïγ-taning nomlur tamγaq-ïγ(?)
道に結合することにおける法のどくび(要諦)を

5) čoγ-luγ yalïn-lïγ uluγ baqši naruba-ning
威 光 ある 大 師 Nāro-pa の

6) kirtü aγïz-indïn nomlayu yarlïqamïš, qulγaq-
眞實の 口から 說き たもうたる 耳

7) tïn qulγaq-qa, aγïz-tïn aγïz-qa ulaγ sapïγ
から 耳へ 口から 口へ 傳え 繼ぎ

8) bolmïš dantïr-a ärür, saki-lïγ toyïn uluγ
たる Tantra なり。Sa-skya 派の僧大

9) baqši CWX ÇW baγ-lïγ darma torči čoski
師 ? 姓の Dharma rdo-rje chos kyi

10) irgämsän nomluγ tuuγ atlγ baqši üzä
rgyal-mtshan 法幢という師によって

11) yaratmiš ärür" 了也 tübstüz täring bu
作られたり。 底なしに深い この

46b1) dantïr-a-ning, tüpüt-čä-sin körüp,
Tantra の チベット語のものをみて

2) tümkä biligsiz tümäninč qulut
愚才 無學の Tümäninč Qulut が

3) qamïl-lïγ ari-a ačari, tükäl-lig bilig
Qamil (哈密) 人 Ārya (聖) 阿闍梨 全智

4) isdunba baqši-ning bosuγ yarlïγ-ï üzä
Ston-pa 師 の 擧 命 もて

5) ävirü aqdaru täginürim,,
翻 譯し奉る, 私は。

6) čï čïng onunč-ï bars yïl altïnč
至　正　第十　虎　年　第六

7) ay tört yangï-qa üč lükčük baliq-
月　初　四（日）にウチリュクチュク市

8) lïγ qulut m(e)n yangï bosγutčï sariγ tutung
の Qulut, 私,　新　學　Sariγ Tutung が

9) asudai oγul-nïng lïngčï-sï üzä bitidim sadu ädgü
アスタイ王子の令旨によって書寫した, 私は。Sādhu! よきかな。

10) legs-so〔チベット字にて〕善哉　善哉

不明の語を殘したことは遺憾に思うが、要するにインドのタントラ學者 Nāropa (1016—1100)[8] の口承タントラが、サキャ派僧の Dharma rdo-rje chos-kyi rgyal-mtshan 法幢という師によって、チベット語で書かれた。そのタントラをカムル (Qamïl, 哈密) 人の Isdunba (tibet. Ston-pa) 師の命によって、Tümäninč Qulut がトルコ語に飜譯したのである。この內容、チベット語作者・トルコ語譯者、ともに、目下のところ、他に比定すべき文獻は知られていないけれども、元朝支配期に屬する譯經とみて間違いあるまいと考える。

次は「四天王供物法」"Tört m(a)xaranč t(e)ngri-lärkä dor-ma birgü yang" (*Rgyal-po chen-po bshiḥi gtor-ma cho-ga) の題名で知られ、Bodi drm-a (*Bodhidharma) の作、チベット語作者は不明で、トルコ語譯者 Tanvasin Ačari, 書寫人 Bilgä Taluy Šabi のものである。護雅夫氏の紹介[9]でよく知られるトルコ語譯金光明最勝王經第一卷(「序」)の中に收錄され、清朝康熙二六年（一六八七）十月二十四日に敦煌で書寫された。勿論この經典は、金光明經とは別もので、書寫の際に收められたであろうから、護雅夫氏の指摘する如く金光明經の飜譯と同一に考えることはできない。おそらくこれも元朝時代まで下る譯經と考えたい。[10]

文書資料でチベット語からの飜譯が確認されるのは、以上の如くであるが、わずかながら元史には譯經の記載がみえる。元史本紀（卷二九）に「泰定元年（一三二四）秋七月丙午、以畏兀字、譯西番經」とあるが、ウイグル（畏兀）字はトルコ語のこととみてよいであろう。迦魯納答 *(Qarïnadaš? 一三一二年沒) はウイグル（畏吾兒）人で、「天竺教」および

諸國語に通じ、世祖に召されて入朝後、チベット（西番）語を學習し、「以畏吾〔兒〕字、譯西天・西番經論」とある。[37] また必蘭納識理（必剌忒納失里　元史文宗卷三六本紀 *Viratnaśrī　一三三二年沒）は、カムル出身のウイグル人である。幼少よりウイグル・インド語に通じ、入朝後チベット・中國語にも熟達したと思われる。漢文から「楞嚴經」、インド語から「大乘莊嚴寶度經」、「乾陀般若經」、「大涅槃經」、「稱讚大乘功德經」、チベット語から「不思議禪觀經」等を譯したことが知られる。[38] チベット語からの翻譯經典に限らなければ、泥金ウイグル字による「無量壽佛經」（千部）（續弘簡錄　至順二年四月戊辰の條）、高昌出身の舍藍藍比丘尼のウイグル字「法華・金光明經」（二部）（佛祖歷代通載　卷二二）等の寫經事業が行われた。

要するに、以上元朝下においてウイグル人の佛教活動が盛況であったことをうかがわせる史料を列擧してきたが、いわゆるウイグル文字の關係資料の多くが元朝時代に屬するというつもりは毛頭ない。ただ少くともトルコ族のチベット佛教受容に關しては、今のところ、元朝におけるチベット・ラマ教の弘通と關連して考えられるべきかと思う。文書資料の內容に關する比較研究は今後に殘された課題である。

註

① 山田信夫「トルキスタンの成立」（岩波講座『世界歷史』6、四六三—四九〇頁）。

② 羽田明「カラハン朝」（ブリタニカ百科辭典）。

③ F.W.K. Müller, A. von Gabain: *Uigurica* III, IV, 1920. 1930 (*Sprachwissenschaftliche Ergebnisse der deutschen Turfan-Forschung*, Band I, Leipzig, 1972, SS. 169—312); A. von Gabain: *Maitrisimit* I, II, 1957, 1961; 馮家昇「一九五九年哈密新發現的回鶻文佛經」（文物一九六二年七・八期九〇—九七頁）。

④ 羽田亨「トルコ文華嚴經の斷簡」（羽田博士史學論集下卷、京都、一九五八年、一八三—二〇五頁）、W. Radloff: Kuanši-im Pusar (*Bibliotheca Buddhica* XIV, St. Petersbourg, 1911); Suvarṇaprabhāsa (*Bibliotheca Buddhica* XXVII, 1930); F. W. K. Müller・*Uigurica*, 1908 (*Turfan-Forschung*, Band I, SS. 3—60); A von Gabain: Die uigurische Hüen-tsang-Biographie, 1935, 1938 (*Turfan-*

Forschung, Band I, SS. 313—390)；馮家昇「回鶻文寫本『菩薩大唐三藏法師傳』研究報告」（考古學專刊丙種一號、北京、一九五三年、護雅夫「資料紹介、ウイグル語譯金光明最勝王經」（史學雜誌第七一編九號、一九六二年、一二四三頁以下）。

⑤ W. Radloff : Suvarṇaprabhāsa (*ibid.*)；護雅夫、前掲書。

⑥ 同前。

⑦ 筆者は、羽田明教授のもとで、一九六〇年に西域文化研究會の事業として、龍谷大學圖書館所藏の大谷蒐集品について「ウイグル字資料目錄」（『西域文化研究』第四、京都、一九六一年）の作成に參加した。そのときは「佛教」關係のものというほかに、内容上の性質は明らかにされなかったが、その後「文殊師利成就法」の譯述であることに氣づいた。一九六二年に來日した A. von Gabain 教授が關係文書を閲覧された際、とくに願い出て不明だった二、三の單語について御教示を賜った。

⑧ 前掲『西域文化研究』第四、一八八頁參照。

⑨ W. Radloff : Kuan-ši-im Pusar, Beilage 1. Bruchstück des Ārya Rājāvavādaka genannten Mahāyāna Sūtra (*Bibliotheca Buddhica* XIV SS. 69—90).

⑩ 『望月佛教大辭典』第八卷（東京、一九五八年）二二八一二三三頁（「成就法蔓」の項）。

⑪ *Gaekwad's Oriental Series* No. 26, 41, Baroda, 1925, 28.

⑫ ロンドン大英博物館スタイン蒐集品 B. M. Or. 8212 (109) ch. xix 003；*Serindia* I Oxford, 1921, pp. 923, 925；羽田博士史學論集下卷、一六二～一六四頁參照。

⑬ G. Clauson : *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*, Oxford, 1972, p. 407a.

⑭ Arya-rača-avavadaka atl(ï)γ m(a)xayan sudur (Ārya-Rājāvavādaka-nāma-mahāyāna-sūtra, テルゲ版東北大學目錄番號二二一、北京版大谷大學目錄番號八七七）、トルコ語譯者：Qoludï Sanggâšïrï 八面八〇行折本版刻刷斷簡、cf. W. Radloff : Kuan-ši-im Pusar, SS. 69—90.

⑮ 後段第五章テキスト參照。

⑯ W. Radloff : *op. cit.*, S. 74.

⑰ W. Radloff : *op. cit.*, S. 82.

⑱ O. Pritsak : Vorwort zum Nachdruck, 1960, W. Radloff, *Versuch eines Wörterbuches der Türk-Dialecte*, I Band (V—XXVII, §1).

⑲ A. von Gabain : Buddhistische Türkenmission, *Asiatica, Festschrift Friedrich Weller*, Leipzig, 1954, S. 172.

⑳ Ibid., S. 172.

㉑ A. von Gabain : *Alttürkische Grammatik*, Leipzig, 1950, S. 304.

㉒ O. Pritsak : Stammesnamen und Titulaturen der Altaischen Völker, *UAJ*, XXIV, H. 1—2, 1952, S. 59；護雅夫『古代トルコ民族史研究』I、東京、一九六七、七頁、G. Clauson : *op. cit.*, p. 96.

㉓ F. W. K. Müller : *Uigurica* II, 1910 (*Turfan-Forschung* B. I 93(35)—28).

㉔ W. Radloff : *op. cit.*, S. 82.

㉖ *Древнетюркский Словарь*, Ленинград, 1969, стр. 405a.

㉗ G. Clauson : *op. cit.*, p. 611a.

㉗ 蔡美彪『元代白話碑集錄』第一二五碑、一二七頁。

㉘ 同書、一二四頁、註②。

㉙ Dr. G. R. Rachmati (R. Arat): *Türkische Turfan-Texte VII*, Berlin, 1936, S. 52 (*Sprachwissenschaftliche Ergebnisse der deutschen Turfan-Forschung* Band II, Leipzig, 1972, S. 339).

㉚ Louis Ligeti : Notes sur le colophon du《Yitikän sudur》, *Asiatica, Festschrift Friedrich Weller*, Leipzig, 1954, pp. 397—404.

㉛ B. Laufer : Zur buddhistischen Literatur der Uiguren, *T'oung Pao* VIII, 1907, pp. 391—409.

㉜ L. Ligeti : *op. cit.*, p. 398.

㉝ G. R. Rachmati : *op. cit.*, S. 48 (A : T. III M. 131).

㉞ *Ibid.* (C : T. III M. 190).

㉟ suu-sï (suṵ-si) (124), qong (qung) (125, 126) の正字法は、レフィキーとリゲティに従って訂正した。なおG.Clausonはラフマティの解釋に従って、adınçığ ıduk xağan xan süsi 'the army of our elect, sacred ruler (Hend.)' (*An Etymological Dictionary*, p. 611a) とするが、勿論 sü(suu) ＝'Heer, army' と解するのは誤である。

㊱ 元史卷二四、仁宗本紀。

㊲ 元史卷二七、英宗本紀。

㊳ 元史卷一〇六、后妃表。卷一一四、后妃列傳。

㊴ 元史卷二一、明宗本紀。

㊵ 元史卷二七、英宗本紀。

㊶ B. Laufer, *op. cit.*, pp. 393—397.

㊷ 元史卷一二四　哈剌朮哈赤北魯傳（百衲本五b三—一〇）、元史卷三四文宗本紀（一一a九）。

㊸ 村田治郎編「居庸關」I　二二頁。

㊹ 同前、ウイグル小字刻文　註二五。

㊺ 村田治郎編、前掲書では、「天子さま、菩薩、わが主たち」と譯す。'idim(i)z' は「われらが主」であり、敢えて複數形を用いるのは敬語的表現である。

㊻ 村田治郎編、前掲書では、「衆生の尊い天子さまの」と譯す。本刻文の〔s〕と〔z〕の正字法は必ずしも標準的ではない。'idizi' は idiz＋i (idiz : 'hoch, high') ではなく、idi＋si と考えたい。

㊼ 羽田明「Ghazāt-i-Müslimin 譯稿」（『内陸アジア史論集』東京、一九六四年、三二五—三二六頁）、E. D. Denison Ross . *Three Turki Manuscripts from Kashgar*, Lahore, 1908, p. 24.

㊽ A. von Gabain : Buddhistische Türkenmission, *Asiatica*, Leipzig, 1954, S. 171.

㊾ G. Clauson : *op. cit.*, p. 792b.

㊿ *Древнетюркский Словарь*, стр. 263a ; G. Clauson : *op. cit.*, p. 961b ; J. É. Kowalewski : *Dictionnaire Mongol-Russe-Français* (vol. III) p. 2368b.　借用語でないとすれ

ば、この yirtinčü の語根は何か。おそらく yir (yer)〈土地、ground〉の派生語と考えられるが、接尾辭 -tinčü の分析的説明が十分につかない。

(51) B. M. Or. 8212 (109) ch. XIX 003.

(52) *Serindia* I p. 923, 925；羽田博士　史學論集下卷、一六二～一六四頁。

(53) H. V. Guenther・*The Life and Teaching of Nāropa*, Oxford, 1963.

(54) V. V. Radlov-S. E. Malov・*Suvarṇaprabhāsa*, Sūtra, *Bibliotheca Buddhica* XVII, St. Petersbourg, 1913；Saadet S. Çagatay, *Altun Yaruḳlan iki parça*, Ankara, 1945；護雅夫「資料紹介、ウイグル語譯金光明最勝王經」(前掲書)。なお、護雅夫氏は「四天王讚」と紹介されたが、正確な題名ではない。ここでは「四天王供物法」と試譯した。しかし、西藏大藏經所收の「四天王供物」(デルゲ版東北大學目錄 No. 3772 北京版大谷大學目錄 No. 4590) とは、内容上も對應しない。

(55) モンゴル＝元朝時代、普通にはウイグル族にあっては、彼らの言葉をトルコ語 Türk tili といわず、ウイグル語 Uyγur tili といった。ところで金光明經のレーニングラード版には、uyγur tili (「四天王供物法」)、türk uyγur tili (「八大聖地制多讚」・「金光明經」) とある。後者の türk uyγur tili は翻譯時に türk tili とあったものに、のちに uyγur の語を付加したことを意味するに違いない。

(56) 元史卷一三四、迦魯納答思傳。

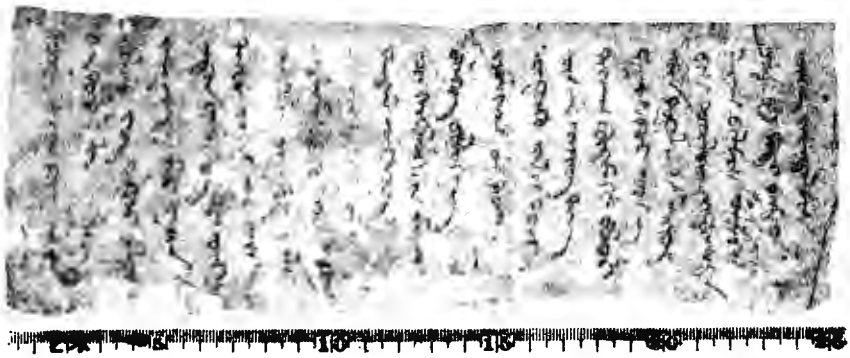
(57) 元史卷二〇二、釋老傳。

附　記

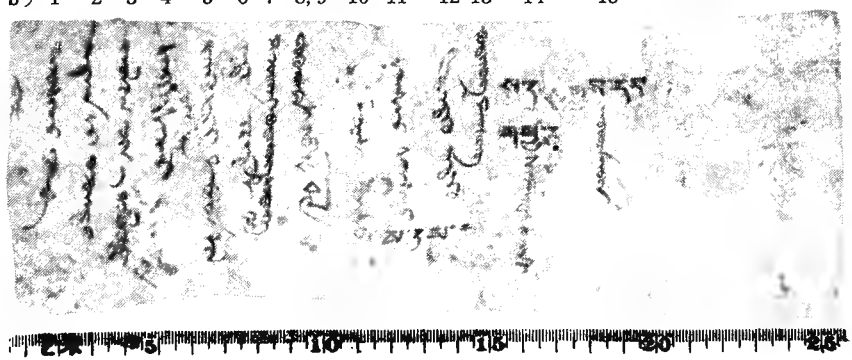
チベット文の校定にあたって、デルゲ版東北目錄 No. 2717 當該テキストについては、羽田野伯猷教授の御好意により參照を得た。

五　テ　キ　ス　ト（付・チベット文）

a）1　2　3　4　5　6　7　8　9　10　11　12　13　14　15　16　17　18　19　20　21　22



b）1　2　3　4　5　6　7　8, 9　10　11　12　13　14　15



ウイグル文	チベット文
大谷蒐集品文書 No. 2695	デルゲ版東北目録　No. 2717（S.） 北京版大谷目録　No. 3539（P.） Bstan-ḥgyur Rgyud-ḥgrel Ñu : （S. 84a4-84b3）（P. 99a3-99b3）

(S. 84a4) (P. 99a3)
rgya gar skad du / ārya mañdsu śrī sā dha naṃ / bod skad
〔Ārya-mañjuśrī-sādhana〕
インド語でアールヤ・マンジュシュリー・サーダハナ　チベット

du / ḥphags pa ḥjam dpal gyi sgrub paḥi thabs / ḥjam dpal
語で 聖なる 文殊師利 の 成就 の 方法 文殊師利

gshon nur gyur pa la phyag ḥtshal lo / tshad med pa daṅ
童 子 に 歸命する

byaṅ chub sems (P. 4) bskyed de / sṅags ḥdi brjod ciṅ mi dmigs

stoṅ par (S. 5) bsgom / oṃ sva bhāba bi śuddhaḥ sarba dharmmāḥ ②
〔Oṃ svabhāva-viśuddhāḥ sarvadharmāḥ

sva bhāba bi śuddho haṃ / stoṅ ñid daṅ las baṃ paṃ a
svabhāva-viśuddho 'haṃ〕

dkar las / rgya mtsoḥi steṅ du padma zla ba bsam / de steṅ

raṅ sems a dkar ñid gyur las / (P. 5) ḥod ḥphros don byas ḥdus

③ par lhar gyur te / shal gcig phyag gñis mchog sbyin udpala ④

bsnams / (S. 6) rdo rjeḥi skyil kruṅ ḥod zer rab ḥphro ba / dar

dkar na bzaḥ rin chen rgyan gyis spras / ston zlaḥi mdog

can laṅ tsho ldan pa bsgom / oṃ ⑤ bāk (P. 6) kyai daṃ na maḥ rig
〔Oṃ vākye da namaḥ〕

sṅags rgyal po ḥbuṃ phrag gcig gis ḥgrub / zla ba gcig gis

blo ḥphel rig pa ḥdsin / dṅos sam rmi lam ñid du mthoṅ

(S. 7) thos ḥgyur / grub paḥi mtshan ma gshan yan snaṅ bar ḥgyur

/ ñi zla gzas zin dus su ma śva (P. 7) ñid / dar dkar gyis dril lce
śa ?

ḥog bcug la bzlas / myu gu byuṅ ḥgyur ḥdi ni grub pa yin

/ yaṅ na ral gri ñid bzuṅ rig ḥdsin ḥgyur / gre phugs a

dkar dag las ḥod ḥphros pas ⑥ / (S. b1) rgyal ba kun gyi blo gros

dpag med dag / ḥdus nas (P. 8) khoṅ du thim pas lus kun kheṅs

/ mi brjod ⑦ dran paḥi gzuṅs ni thob par ḥgyur / sñiṅ dbus

zla baḥi dkyil ḥkhor rtsibs drug la / ḥbru drug yi ge ba kod

la gyas gyon bskor / śugs drag rtse mo rno shiṅ rab dkar

a−1) T'RK T'VR'X KWYC KWYZ WN
tärk tavraq küč küzün-
迅 速に 威 力

(S. 2) (P. b1)
bas / ñes ḥjoms stobs
罪を滅ぼす力（の）

2) K' TWYK'L LYK PYLK'
kä tükällig bilgä
を 具備せる 賢き

ldan myur ḥdsin
具足，迅速に保つ（こと）

3) PYLYK YK TWD//CY PWLWR,,
biligig tudtačï bolur.
知識を 持つもの となる。

rab gsal ḥgyur /
あきらかになる。

4) V'M'XWYD//L'R V?NS'N
Y ? L N Y N'
? -lar ?
? ?

pha rol phyin daṅ
到 彼 岸 と

5) "DYN KWYL'M'K L'R 'WYKWS
adïn külämäklär üküš
の名を 稱揚すること 多

bstod pa maṅ po daṅ /
賞讃 多くの と

6) T'LY/ 'WYKDY L'R 'WYZ '
tälim ögdilär üzä
數の 讃辭 もて

mtshan daṅ® brjod daṅ
名號 と 誦唱 と

7) ///KWP P'R'MYD L'R
ögüp paramïdlar
めで, 諸德行

mchod pa sna tshogs daṅ
禮拜 諸種の と.

8) PYRL' ///////KW T'BYN/ NWX
birlä yükündü tapïnγu ?
と 禮 拜

/ maṇḍal dbul shiṅ gsol ba
マンダラを供養して祈禱

9) L'R Y'SD ////////// WL /
-lar ? ol ?
?

gdab par bya /
すべし。

10) M'ND'L 'WYDWNWP /////
mandal ödünüp ?
マンダラ 祈願し

11) TWYZ K'RKWLK SWZ 'WLWX
tüzkärgülüksüz uluγ
「無上 の 大なる

12) PYLK' PYLYKYK PYRW
bilgä biligig birü
賢き 知識を 與え

13) Y'RLYX'Z WN /YP
yarlïqazun tip
たまえ と

14) 'WYTWNKW 'WL,, MWNY
ötüngü ol. munï
祈願するものなり。 これ

ḥdi
これ

15) 'WYZ ' 'YNCYP T'RK
üzä inčip tärk
もて かくして すみ

ni myur du
こそすみやかに

16) T'VR'X PWYDM'KY PWLWR
tavraq büdmäki bolur
やかに 成就するなり。

ḥgrub par ḥgyur ba yin (P. 2)
成就するものとなる。

17) M'NCWSYRY 'WYZ '
mančušïrï üzä
文殊師利 によって

/ ḥjam paḥi dbyaṅs ⑨
柔和なる音聲

18) 'YYYN TWDWLMYS /RYP
iyin tudulmïš ärip
隨い 攝せられている,

19) PYS TWYRLWK VYDY'SD'N
biš türlüg vidyasdan-
五 種の 明處

kyis byin gyis
にて 祝 福

20) L'RYX PYLMYS 'WXMYS
larïγ bilmiṣ uqmïš
を 知りたる 解したる

brlabs paḥi
されたる

21) CW// M'DY P'NDYT
čong madï pandït
偉大なるマティ=パンディト

paṇḍita chen po matis (S. 3)
學者 大 マティが

22) 'WYZ ' Y'R'DYLMYS
üzä yaradïlmïš
によって 作られた。

mdsad pa rdsogs so //
作り たもうた。

① (P.) : arya ② (S.) : -aḥ ③ (P.) : pas ④ (S.) : utpala ⑤ (S.) bā
⑥ (P.) : bas ⑦ (S.) : brjed ⑧ (S.) : nas ⑨ (P.) · dpaḥi

註：a） 第4行と第9行の音譯は，確定しがたい。... adïn külämäklär は tibet : mtshan, üküs tälim ögdilär は tibet : bstod pa maṅ po, yüküngü tapïnγu(?) は tibet : mchod pa, mandal ödünüp は tibet : maṇḍal dbul-shiṅ に，それぞれ對應する。paramïdlar は，tibet : pha-rol-phyin<skr. pāramitā の譯語であろうか。複數形によって〈到彼岸〉を實現すべき〈諸德行〉を意味したと思われるが，語句の配列がチベット文とは異なる。第21行 čong (čung)〈大きい〉は，これまでチャガタイ-トルコ語ではじめて知られ (G. Clauson, An Etymological Dictionary p. 424)，五體淸文鑑（譯解 上卷，京都 1966, p. 749 〔13251〕)，G. Jarring (An Eastern Turki-English Dialect Dictionary, Lund 1964 p. 75) などにみえる單語である。ここでは破損のために語頭二字だけしか確認できないけれども，tibet : chen-po に對する語彙として，これ以外には考えられない。

b—1) M'NCWSYRY NYNK
mančušïrï-nïng
文殊師利　の

// rgya gar śar phyogs
インド　東　方

2) S'D'N'SY CWXDW
sadanasï　čoqdu
成就法は〝威光ある〟

dsa ga tā laḥi
ジャガターラの

3) Y'RLYX 'WYZ ' XWLWDY
yarlïγ　üzä　qoludï
命令　によって　コルディ

paṇḍita chen po dā na śī las
學者　大　ダーナシーラが

4) S'NKK'SYRY
sanggâšïrï
サンギャシリが

bod yul gyi
チベットの

5) Y'NKYRDY TWYPWT TYL
yangïrdï　tüpüt　tïl-
新たに　チベットの 言葉

dbus draṅ sroṅ srin poḥi
ウイ（衞）仙人　羅刹の

6) YNTYN 'V̇YRDYM
ïntïn　ävirdim
から　譯した（私が）。

riṅ① lhaḥi skad las bod kyi
高神（天）の語よりチベットの

7) M'NCWSYRY PWDYSTV XWDYNK'
mančušïrï　bodistv　qudïnga
文殊師利　菩薩　さまへ

(P.3)
brdar ḥkhrul pa med par
語に　あやまりなく

8) YWKWNWRMN
yükünürmen
禮拜する（私は）。

bsgyur baḥo //
譯した。

9) S'TW
satu
サードゥ（sādhu）

10) LYXSW LYXSW
lïγso　lïγso
リグソ　リグソ（legs-so）

11) S'NS'Y S'NS'Y
šansay　šansay
シャンサイシャンサイ（善哉）

12) 'DKW 'DKW
ädgü　ädgü
よきかなよきかな

13) PWDYSTV MX'STV
bodistv maqastv
菩薩 摩訶薩

14) S'M'ND'P'TYRY
samandabatïrï
サマンタバドラ

15) "PYT' 'P' '
abita-abaa
アミターバー

① (S.): rir

b) 第9行 satu (skr. sādhu), 第10行 lïγso lïγso (tibet: legs-so), 第11行 šansay šansay (chin. shan-tsai 善哉), 第12行 ädgü ädgü は, 各々インド・チベット・中國・トルコ語による, 同じ意味の感投詞的祝語である。なお第11行の左側に, 一種の「飾り字體」でチベット字 "legs-so" とあるが, スタイン蒐集品中の元朝至正十年 (1350) 書寫佛典 (British Museum Or. 8212 (109) ch. XIX 003) の第46葉b面第10行目のチベット字と同一字體である。第7・8・13・14・15行は, 別の筆跡で, より鮮明に書かれている。第11行目下部にみえるチベット字 (sa ñ sa?) はこれと同筆の細書きであるが, 第14・15行目上部のチベット字 (sa dm..? gyas?; dań gphya cha?) は, また別な筆跡のようにみえる。意味は明らかでない。

語 彙

Abita-abaa, skr. Amitābha 阿彌多婆, 無量光 (阿彌陀佛) b) 15
ad (at) 名 a) 5
ädgü よい b) 12
är- ある a) 18
ävir- 翻譯する b) 6
bil- 知る a) 20
bilgä 賢い a) 2, 12
bilgä bilig 英知
bilig 知識→bilgä a) 3, 12
bir- 與える a) 12
birlä と, ともに a) 8
biš 五 a) 19
bodistv, skr. bodhisattva 菩薩 b) 7, 13
bol- ある, なる a) 3, 16
büd- (büt-) 成就する a) 16
čong 大きい a) 21
čoqdu, mong. coqto 權威ある, 威光ある b) 2
inčip かくして a) 15
iyin 隨い a) 18
küč 力 a) 1
küč küzün 威力
külä- 稱揚する a) 5
küzün 力→küč a) 1
lïγso, tibet: legs-so=skr. sādhu b) 10
Madï (Mati), skr. Mati 人名 a) 21
Mančušïrï, skr. Mañjuśrī 文殊師利 a) 17, b) 1, 7
mandal, skr. maṇḍala 漫荼羅 a) 10
M(a)qastv, skr. Mahāsattva 摩訶

薩 b) 13
m(e)n 私（第一人稱 單數） b) 8
munï これを（指示代名詞 對格） a) 14
ol それ（指示代名詞 主格） a) 14
ödün-(ötün-) 祈願する a) 10, 14
ög- 賞でる a) 7
ögdi (ögti) 讚辭 a) 6
pandït, skr. paṇḍita 學者 a) 21
paramïd (paramït), skr. pāramitā 波羅密，到彼岸，德行 a) 7
Qoludï Sanggâšïrï (skr. Saṃghaśrī) 人名 b) 3—4
qud (qut) 幸福，敬稱 b) 7
sadana, skr. sādhana 成就 b) 2
Samanda-batïrï, skr. Samanta Bhadra 普賢 b) 14
satu (sadu), skr. sādhu b) 9
šansay, chin. shan-tsai 善哉 b) 11
tapïn- 禮拜する a) 8
tavraq すみやか a) 1, 16
tärk tavraq 迅速（に）
tälim 多い a) 6
üküš tälim 多數（の）
tärk 早い→tavraq a) 1, 15
tïl 舌，言葉 b) 5
ti- いう a) 13
tud-(tut-) 取る，持つ a) 3
tudul-(tutul-) tud- の受身形 a) 18
tüpüt チベット b) 5
tükällig 完全な -kä——を具足せる a) 2
türlüg 種類（の） a) 19
tüzkärgülüksüz 無上の a) 11
uluγ 大きい a) 11
uq- 理解する a) 11
üküš 多い ⟶tälim a) 5
üzä によって a) 6, 15, 17, 22 ; b) 3
vidyasdan, skr. vidyāsthāna 明處 (branch of knowledge) a) 19
yangïrdï 新たに b) 5
yaradïl-(yaratïl-) 作られる a) 22
yarlïγ 命令 b) 3
yarlïqa- 命令する，～したもう a) 13
yükün- 禮拜する a) 8, b) 8

文法語尾

-di- b) 6
-γu, -gü a) 8, 14
-gülük a) 11
-ï, -i a) 16 ; b) 6
-ïγ, -ig a) 3, 12, 20
-im b) 6
-ïn a) 5
-kä a) 2
-lar, -lär a) 4, 5, 6, 7, 9, 20
-lig a) 2
-mäk a) 5, 16
-mïš, -miš a) 18, 20, 22
-nïng b) 1
-ntïn b) 6
-nga b) 7
-p, -ip, -üp a) 7, 10, 13, 18
-sï b) 2
-suz a) 11
-tacï (-dacï) a) 3
-ü a) 12
-ur, -ür a) 3, 16 ; b) 8
-zun a) 13

A Fragment of the Mañjusri-sādhana in Uyγur Script

Juten Oda

No. 2695 of the Otani Turfan Collection preserved in the Ryukoku University Library, Kyoto, is a fragment of the Manjusri-sadhana (author: Mati) in the old Turkic language, corresponding in content to that of the Tibetan Tripitaka No. 2717 (Bstan-ḥgyur-rgyud- ḥgrel): Sde-dge edition Tohoku University Catalogue; OR No. 3539 Peking ed,, Otani Uni. Catalogue). According to the colophon of our fragment, by order "of Authority" (čoqdu<Mongol.: čoqto) a person named Qoludi Sanggâširi translated it anew from the Tibetan language. This Turkish translator of the Ārya-rājāvavādaka-nāma Mahāyāna-sūtra in blockprint (W. Radloff ed.), was put into Uyγur (old Turkic) language by order of the "Qaγan Emperor" (Qaγanq an: the title of Mongol-Yuan Emperors in Uyγur). Generally we should give adequate consideration to the fact that the Uyγurs came into contact with Tibetan Buddism through the Mongol-Yuan Dynasty.